
ニートのニーちゃん

naka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニートのニーちゃん

【コード】

N6221M

【作者名】

naka

【あらすじ】

ニーちゃんはとってもニートなんだ

ニーちゃんとユキちゃん

ニートのニーちゃんはとってもニート

今日も公園で働きもせず子供たちと遊んでいました

「ニーちゃん、ニーちゃん遊ぼう」

ニーちゃんはとっても人気者で

皆はニーちゃんが大好きです

ユキちゃんもニーちゃんがダイスキで

ニーちゃんもユキちゃんのことをダイスキです

「ニーちゃん、ニーちゃん。バック買って〜」

ユキちゃんはダイスキなニーちゃんにきょうもおねだりです

ニーちゃんはいいました

「ごめんね。ボクはおかねがないんだ」

「働けよ。金がないなら働いて稼げばいいじゃないか。その手足は何をする為についていると思っっているのだ。」

その立派な手足は労働し、糧を得て、大事な人を守り、次世代へと繋ぐ。手足、身体はその為にある。それが生きると言う事だ。

身体を思う様に動かせない人も懸命に生き、次世代へと繋いでい

く。これは人間、獣問わず生命に与えられた義務である。

それをしようともせず、ただ毎日を生きているだけの貴様は正しく屑だ。そんな屑の貴様に命令してやる。

働け、労働で汗を流し、その報酬を私に貢げ。それを目的とし、労働に励むといい」

ニーちゃんはなんだかかなしくなりました

なかよしで ダイスキなユキちゃんがおこっているからです

「ユキちゃんはどうしてそういうことをいうの？ボクかなしいよ」

ユキちゃんはいいます

「なんでだとおもっ？」

「ボクのがキライだから？」

ユキちゃんはクビをふっつていいました

「正解じゃない。私は君に働いて欲しかったんだよ。

周りを見てみたまえ。君の同年代だった人は今は何をしている時間だ？ そう。汗水流して働いている時間だ。

それを君は年老いた親にパートまでさせて、養ってもらいながらこんなところで子供らの王様気取りとは如何なものかと思う。

大人というのは常に手本であるべきなのだ。

これは私の考えだが、最近の子供は、とまず嘆く前に何故そうなっているのを考え、たどり着いて欲しい。

自分らの世代の教育が間違っていたという事に。それから何をすべきか結論を見出し、自ら反省をし、正しい姿を示す事が大切なのだと私は考える。

勘違いしてほくはないから言うが、これは大人はガチガチにルールを守らなければならぬと言っているのではない。ルールの適切な破り方、手の抜き方を示すのだと言いたい。

そういう観点から見ると君の生き方は有害であり駆除されるべきだと思うが、まだやり直しもきくと考えた。だから君はそういう反省の出来る大人になってほしいと考える。

貴様のような屑ニートはなにか強制されないと無理だとも考え、私は心を鬼にして言った。私に貢げ、と。理解してほしい」

ニーちゃんはなくのをやめるとポッケからタバコをとりだしヒをつけクチにくわえてやすらいだからユキちゃんにいいました

「君も似たような身分だろう」

「違うない」

ふたりはなかよくおうちにかえってただメシをたべます
いつまでも いつまでもふたりはニートです

ニーちゃん うみにいく

ニートのニーちゃんはとつてもニート

きょうはニーちゃんはなかよしのかなちゃんとうみにきてます

「みてみて かなちゃんおっきいカイがとれたよ」

ニーちゃんはほこらしげにカイをかなちゃんにみせます

「わぁほんとうだぁニーちゃんすごいね」

かなちゃんもおっきいカイにはおどろきです

「ボクもおっきいのをとるぞー」

「かなちゃんきょうそうだよ」

そついつてふたりはきそつようにすなをほります

「あ、あつたぁ」

「じつちもあつたよぉ」

しばらくとりつづけているとふたりはおなかがすいたのにきがつかず

「ねえねえニーちゃんおなかがすいたね」

「うんそうだね。おひるにしよう」

ふたりはおひるにすることにしました

「おいしいね」

「うん。おいしいね」

ふたりはパクパクモグモグたべます

「のどにつまるね」

「ならボクがかつてくるよ。このあいだおこづかいもらったし」

そういつてニーちゃんはピカピカのごひゃくえんだまをほころしげににとりだしました

「なにがいい」

「ボクはいいよお」

かなちゃんはえんりよします

「じゃあ、いっぽんをふたりでわけよう」

ニーちゃんはめいあんだと、いいました

「いらないつて」

「そうなんだ」

ニーちゃんはざんねんですがひとりでジュースをかいにいきました
ふたりはおひるをすませるとまたカイをほりだしました

ふたりのバケツはカイでいっぱいです

「いっぱいだね」

「あぁっと電話だ。すまない……あぁ、うん……そうか、ありがとう」

「かえろうか」

「うん、そのまえにおはなつみにいってくるね」

そういつてかなちゃんはバケツをもって、はしっていきます

しばらくたってもかなちゃんはきません

するとオトナがやってきてニーちゃんにいいました

「シジミ取りのチケットは持っているかい？無いの？五百円だよ、はい」

ニーちゃんはおかねがたりません

しょうがないのでカイをかえしました

それからしばらくたってかなちゃんはかえってきました

「どつやら巡業員は行ったようだね」

ニーちゃんはおどろきました

「ああ、ここいらは有料だからね」

そういうとかなちゃんはじぶんのもっているバケツからおっきなシジミをとりだしニーちゃんにみせました

「キミのカイはどれだい？ああ、ないのだったけ。これで解つたら、キミは駄目な男だつて。要領悪いキミはなにをやってもダメなんだつて。キミが出来る事は少なく生活出来ないよそれじゃあ。だけど、まあ、キミは家事だけは悪くないよね。だ、だから、ボ、ボクが養つてあげてもいいんだよ。稼ぎもキミと比べて段違いに良いんだし」

ニーちゃんはうわぎからタバコをとりだしヒをつけてクチにくわえてヤスラいでからいいました

「すまない。よく聞こえなかった」

「……そうか。独り言だ。ああ、すまないがボクはちょっと酒が入つてるから帰りは君が運転してくれ」

「わかった」

ニーちゃんはおかえりにかなちゃんからカイをわけてもらいました
ふたりはとつてもなかよし

「ニーちゃんどチビッ」

ニートのニーちゃんはとってもニート

ニートのニーちゃんはおにいさんです。「じいんでみんなとよくあそびます

「ニーちゃん、ニーちゃん、やきゅじゅるじゅる」

おとこのこがめをかがやかせながらよってきます

「だめー、ニーちゃんはわたしたちとあそぶのー」

おんなのこもよってきました

「うーん、こまったなー」

ニーちゃんはこまりました

おとこのことおんなのことぜんいんでなかよくあそびたいからです

「ブツモリなんておくれるんだぜ。ニーちゃんパワプロしよーよ」

「ニーちゃんはわたしたちとドーブツのモリするのぉー」

「そーだ、ゲームはやめて、みんなでおにごっこをしよう」

そうすればみんなであそべる。そうおもってニーちゃんはいいま
した

「ええ、マジ勘弁。昭和世代はこれだから」

「鬼ごっこことかって石器時代の遊びじゃね。つか無理だから」

「もういいや、あつちで合コンごっこしよーぜ」

「そうしよー」

そういつてチビっこたちはむこうへとはしっていきました

それをみてニーちゃんはなんだか泣きたくなりました

だがグツとがまんします。ニーちゃんはおとこでおとなですから。

ニーちゃんポケットからタバコのハコをとりだし、いっぽんぬいてくちにくわえヒをつけやすらぎます。

けいたいはいざらもとりだし、ベンチのヨコにおいておきます

「三番とあー、六番があ、ベロチュウ」

ええ、やだあー、キャッキャッ

チビっこたちの合コンごっこはおおいにもりあがっているようです

「憧れるかい」

「ユキか。どうだろうな」

「私は憧れるよ。あの頃の私は馬鹿だった。勉強ばかりで友達も少ない青春。その友達も今ではな。」

私は無意識の周りは馬鹿だと見下していたのかな。今になって解ったよ、学校は勉強だけを頑張る場ではないって。もしも戻れるのならやり直したいって思うよ。

たった一回の、それもつまらない挫折でいまではすっかり社会復帰に不安な臆病ニートだ。付き合いの深い友達をつくれていたら、IF話だがな。すまない忘れてくれ。

それよりサクセスで天才型のそこそこ自慢の投手が出来たからリベンジさせる」

ニートちゃんはおもいました。じぶんはどうなのだろうかと

だけどニートちゃんはかんがえるのをやめました。ニートだからです
ふたりはユキちゃんのいえでなかよくゲームをしてあそびます。
ふたりはニートでなかよしだから

ニ一ちゃん ひろこぶりのおからまの(前書き)

ニーちゃん ひさしぶりのおかいもの

ニートのニーちゃんはとってもニートなんだ

ニートなんだけどピッキーじゃないんだってフシギだね

だからニーちゃんはひとりでもかいものにいけるんだよエライね
ニーちゃん

「イチゴのまっちゃん、まっちゃんシュークリームとまっちゃんモンブランを一つづつおねがいます」

ニーちゃんはケーキをかにきました。シューケースのなかのケーキはどれもたいへんおいしそうでニーちゃんはまよいましたが、まっちゃんがスキなのでまっちゃんばかりでちゅうもんします

「まっちゃんショートとまっちゃんシュー、まっちゃんモンブランが一つづつですね」

おねえさんがステキなエガオです。きれいなおねえさんなのでめんえきのないニーちゃんはどきどきしました。

「いじょうです」

「はい、しばらくおまちくださいね」

そういっておねえさんはケーキとほれいざいをテキパキとはこに
つめ、あつというまにかいけいです

「800えんになります」

ニーちゃんはおさいふからせんえんさつをとりだし、おねえさんにわたしました

「おつり200えんです。ありがとうございます」

ニーちゃんはケーキをうけとりみせをでると、そとはとってもあついです

ニーちゃんはおもいました。

これが温暖化と何か関係あるのであろうかと。大佐もおっしゃていたがこのままでは人間が住めなくなるばかりか、共存している地球の仲間たちに迷惑をかけることになっている。

やはり母なる地球からそろそろ巢立つ時なのだ。我々は揺りかごをもう欲してはいない、欲してはいけないのだから。

「ニーちゃんだ。こんにちは」

ニーちゃんはいじにケーキのハコをもってあるいたらトモダチのかなちゃんとおいました

「かなちゃん、こんにちは」

ニーちゃんもかなちゃんにちゃんとあいさつです

「ニーちゃんはなにをしているの」

「うん、これからいぼうをきかしたへやでケーキをたべながらお

んだんかについてかんがえるの」

「ふーん、すごいねえ」

「そうだなちゃんもいつしよにケーキたべよう。ほくひとりだから」

「えっ、いいの」

「うん。ひとりよりふたりのほうがいいよ」

「うん。じゃあおよばねするね」

そういつてふたりはなかよくニーちゃんのおうちにむかいます

「おじやまするね」

「いらっしやーい」

「ふふふ、なんだかおかしいね」

かなちゃんはいいました

「うん、おかしいね」

ニーちゃんもなんだかすこしユカイなきもちになりました

ニーちゃんはへやにはいるとあついでまずレイボウのすいっちをいれました。せってい20です。

「ニーちゃんはいれいぞうこからひえたおちゃとさっきかつたケーキをおさらにするときにもりつけだします」

「ニーちゃん、ニーちゃんさむいよ」

「そうかな」

「ニーちゃんにはすこしはださむいぐらいのせつていおんどですが、じよせいのかなちゃんでもなくてもあんまりなおんどです」

「かなちゃんはいいました」

「おんだんかだからいけないんだよ」

「と。ニーちゃんもいいます」

「でもひとりぐらいこうしてもたいさないよ」

「ふむ。たしかにそうだ。君の意見は正解でもある。だが、それは君だけのみという前提であり、ボクはそれを否定しよう。」

「君がどの様にして自分だけは冷房をガンガンきかせれると思ってるんだい。俺は冷房をガンガンきかすけどお前らは我慢している、と。それは流石に無理だろう。」

「皆が皆、君みたいな考えだったらもうどうにもならないだろう。皆が少しづつ頑張る。それでボクはいいと思うんだ」

「かなちゃんはそういうフォークでまっチャイチゴをきりとりクチにはこびました」

「うん。君のセンス、この場合は食のセンスだが、実にボクとあう。」

美味しいよ、ありがとう」

「どういたしまして」

ニーちゃんは褒められてうれしくなりました

ニーちゃんはおちゃをのみ、ポッケからタバコをとりだそうとすると

「ああ、すまないがちよつと待つてくれないか。折角の一時だからタバコはキーキがなくなってからにしてほしい。すまないとはおもう」

なるほど、とニーちゃんはおもいました

かなちゃんとの楽しいひとときにタバコはびつようないってことをニーちゃんはまなびました

「ぼくはかなちゃんのいけんもそうだとおもつよ。だけどぼくは二トで、このあつさにたえられないと、だからわかってほしいんだけどダメかな」

「これはボクのいけんだからニーちゃんにはきょうせいできないの。だからきにしないで。それよりもそのちらほら見えているDVDを片付けてくれないかな。ボクも女性なんでね視界にそういうのが入ると恥ずかしいんだよ。しかし、まあ、ラインナップが、これなんて、なんてこつたい。ボクじゃあムリそうだよ」

「それはまあ、すまない」

「ふふふ」

「くくく」

ふたりはどろじにわらいました

それからあとモニーちゃんかなちゃんとすてきなじかんをすごしました

とてもとてもたのしいふたりのじかんです。だってふたりはなかなよしですから

ニーちゃんとなつ

ニートのニーちゃんはとつてもニート

ニーちゃんはきょうもこつえんにいます

だけどこつえんにはチビッコとそのおかあさんもあまりいません

「なんでだれもないのかな」

ニーちゃんはかんがえました

「そうか。なつだから、あついからウミかファミレスにみんないてるんだ」

ニーちゃんもファミレスのドリンクバーがダイスキです

だけどニーちゃんはニート

タバコのねあげもちかぢかありますし、そうほいほいとファミレスなんかにはいけません

「あついなー」

ひかげのすずしいポジションのベンチをかくほしていてもあついものはあついのです

ニーちゃんのからだからはあせがどくどくとながれてきてます

ただでだいじょうぶ。こうえんですからミスはむりょうです

ニーちゃんはせいきんでかおとつでをあらい、すいぶんほきゆうしてねっちゆうしょうもだいじょうぶ

「ニーちゃんこんにちは」

「ユキちゃんこんにちは、きょうもハロワ？」

「ユキちゃんはいました」

「ちがうよ。きょうはね、やきゆうをみにいつてきたの」

「ニーちゃんはおどろきました」

「やきゆうってあのやきゆう？めずらしいね」

「あのね、わたしのぼこうがね、じゅんけっしょうまでいったんだ。おうえんしてきたんだ」

「へー、で、どうだったの」

「ああ、惜しかったと言えはそうだったが、何かね、先に一点とつたはいいが終盤には逆転されるなど思ったら案の定で、やっぱり一人良いピッチャーがいても、こういった言い方は失礼だと承知の上で言うと地方四番手クラスの野球部ではベストエイト入りで良くやったと思うが、ついその先を望んでしまっし負けてしまっしで悔しいよ。」

極端に特化チームでないかぎり甲子園は無理だろうね。だから私

としては守備特化野球でガチガチに固め、失点を低く抑えて一点で勝つ。そうするぐらいでしか無理ではないかと思う。

この場合の欠点は単純で簡単だ。チャンスが数少なく、それを物に出来ないという事だ。例えば相手のピッチャーが素晴らしく不運にも絶好調で得点無しとか、相手の打線が強力でぼんがぼんが打たれてしまい気候、疲労による集中の途切れで守備崩壊したりとかあるがその時はその時なんだよ。不運だったと。

それは相手が圧倒的に格上出来ない限りはどんなチームでも相性、タイミングでどちらかに転がるから、格上に勝つ、勝てる野球となると極端守備特化で、そもそもそういう議論は無駄と承知の上であえて主張する。プロではない学生野球はどちらかといえばそういうチームをつくるべきだと。派手打線はプロに任せておきなさいよと私は言いたいと思うかい」

そうユキちゃんはいっきにいます

二ーちゃんはそれをきいて、ポツケからタバコのハコをとりだし、いっばんとりだしましたがあせでしみができていたのでどします。やすらげません

「そうだな。俺は野球ゲームでしか野球を知らないからなんとも言えないが、そんなもんはチームの選手にあわして臨機応変にチームをつくれれば良いと思うよ」

「違うない」

ユキちゃんもそれはそうだなとかんがえなおしました

「これからろくがしたのいえでみるけどニーちゃんもいっしょにみ
やじみ

「うん」

それからふたりはなかよくユキちゃんのいえでふたりのぼろろの
やきゅうをみました

ふたりはとつてもなかよしです

ニーちゃん もとニーートのニーちゃん

もとニーートのニーちゃんはとってもむしょくなんだ

ニーちゃんはきょうはなかよしのかなちゃんとあそんでいます

「ニーちゃんのはたらきたいの」

かなちゃんはききます

「うん」

「ニーちゃんはえらいね」

かなちゃんはそんなニーちゃんをほめてくれます

「そうだね、ニーちゃんはどんなことがしたいのかな」

「えとね、えとね」

「まずなにができるのかをおちついてかんがえよう」

そうだとおもいニーちゃんのかんがえます

ほくができることは

「ないや」

「そうだね。君が所得を得られる様な技術は何一つ持ってはいない

ね。対人スキルもなんらかの資格もない。ボクは君の手料理は好きだがそれは店で出されたら二度目はないかなってレベルだ。何故に地元で素人の家庭料理で外食をしなければならぬのだろうか考え、やっぱり足はむかないだろう。

出来ることの少ない君の選択肢はかぎりなく狭くなったな。というか長いことニートやってたらだと過ごしていた君が働きたい、働きたい働いて欲しい、需要と供給があつたのではない採用なんて事はまずない。

君は勉強するべきだつたのだよ。介護でも大型車両でも資格とつてだ。それもしなかつた、やろうとも思わなかつたから君はニートなんだ」

ニーちゃんはそれとおりでだとおもいじぶんがはずかしくなりました
「すまない。少し言いすぎだな。まあ、君が働きたいと思う気持ちは素晴らしいと褒めるとまではいかないし、立派でも、ないしな、うん、まあ、普通の事だが良いことだ。だが現実には現実だ。

さつきも言ったが働きたいから就職出来ましたなんて早々とは無理で、しかもニートだつた君だ。大変困難な道だと思う。そこでだ、ボクは一つの道を君に提案する。

毎朝、ボクに味噌汁をつくってくれ、ボクの家を掃除をしてくれ、晩ご飯も頼む。その分はバイト代をだそう。

空いた時間は資格を取る時間でも遊ぶ時間でも構わない。資格分ぐらいはこつちで負担するし、住み込みでも通いでも構わない。あな女を連れ込むのは勘弁して欲しいがな」

ニーちゃんはポケからタバコをとりだし、ひをつけてからくちにくわえてやすらいでからいいました

「逆プロポーズかそれは」

「そつだな。なに結婚は無理でもいま言った事は守るぞ」

これでニートのニシザキは、ゴウホウロリボーイッシュのかなちやんのおむこさんとなり

ニートのニーちゃんはヨシダさんのだんなさんになって、このおはなしはおしまいです

めでたしめでたし。

ニ一ちゃん もとニ一アのニ一ちゃん (後書き)

ニ一ちゃんのニはニシザキのニ

ニーちゃん しんじんさん(前書き)

ニーちゃんはね、ニシザキっていったんだほんとはね

だけどけっこんしてむこいりしたからヨシダでよっちゃんなんだよ

おかしいね ニーちゃん

ニーちゃん しんじんさん

ニーちゃんのあさはとてもはやいの

ニーちゃんはニートだからかなちゃんどけっこんしてしゅふだからあさごはんをよういするためです

ニーちゃんはトモではないとおもっているからかじをしっかりしよじとしてます

「かなちゃん、かなちゃん。あさだよ」

あさごはんのじゅんびもすんだらかなちゃんをおこすのです

ニーちゃんはいっしょうけんめいにやさしくかなちゃんをゆすります

「お、おおう、おはようニーちゃん」

かなちゃんはあさよわいことをけっこんしてからニーちゃんはしました

そんなかわいかなちゃんのことをいまはますます、だいすきになりました

けっこんのいきさつはあれだけど、なかよしだったかなちゃんですからニーちゃんはうれしかったのです

「おはようかなちゃん」

ニーちゃんはまんてんえがおであさの「あいさつ

それを見たかなちゃんもまんてんえがお

ふたりはしんこんさんです

あさごはんもラブラブパクパクおいしいです

「いってくるねニーちゃん」

「いってらっしゃいかなちゃん」

チュツチュツはいつてきますのあいさつ

しよつきジャージャー、しめったシートもせんたくきでアワアワ

ゆかもふきふき、かでんでピツカピカ

こまかいところもマツイボーでだいじょうぶ

ニーちゃんはヨシダだけのかじめいじん

ニーちゃんはヨシダになってはじめてのひとりでおかいもの
します

かなちゃんはきょうはいません

でもだいじょうぶです。ニーちゃんはしんこんさんでしゅぶでせ
いじんだんせいだからひとりでもおかいものはできます

ニーちゃんはかなちゃんがかえってくるまでひとりでおるすばんです

ガチャガチャ

「ただいまーニーちゃん」

かなちゃんがかえってきました

ニーちゃんはすぐにおでむかえにいきます

「おかえりーかなちゃん。きょうもおつかれさまです」

「ニーちゃんありがとう」

「かなちゃん」

「ニーちゃん」

「かなちゃん」

「ニーちゃん」

めとめでつうじあい、ちゅっちゅっはおかえりのあいさつ
ふたりはしんこんさんですから

「あのねあのねかなちゃん」

「なあにニーちゃん」

ニーちゃんはいいました

「俺はもうニートでもないし、今はヨシダだからニシザキでもないのだからニーちゃんは違うんじゃないかなって思うんだ」

「そうだね。たしかにそうだ。だけどボクにとっては君は長いことニーちゃんだったんだ。

最愛の男で、最高の旦那とまではまだ言えないが、ボクの生涯唯一の伴侶としたい男であるキミだ。呼び方なんて愛があり、それが馬鹿にしていたり見下していなければどうでもいいと思う。

ボクはキミと人生を共に送りたいのであって、ニーちゃんだからとかそういうのは関係ないだろう。君もボクがかな、かなちゃんだから結婚しても良いと思ったのではなく、君と出会い、仲良くなつたボクだから結婚したのだろう。

そのボクの名前がカナミというだけの話で、そういう事だとボクは思うけど、君がニーちゃんと呼ばれるのはイヤなのかい？ それなら慣れるまで少し待って欲しい」

ニーちゃんはデンシタバコでひといきついてやすらいだからいいました

「ちがいない」

「だよね」

ふたりはそれからふたりのあいのしょくたくでニーちゃんおてせいのばんごはんをもぐもぐたべてねました

ふたりはなかよしでラブリブリとしゃべります

ニーさん　さんぶんじんかにつきそいした

ニーちゃんはニートで、しゅふでいちじのパパのよていです

だけどよていはみていです

もしもテロやぼうごうがおきたら、バイオハザードが発生したら、あらゆるてんさい、じんさい、じこがかなちゃんにおそいかかったらとかんがえるとしんぱいでしんぱいで、ひるもよるもねむれませんか

そこでニーちゃんのかんがえました

そつだ、はたらこう。ろうどうしてあせをながして、それだけでいつぱいいつぱいになればしんぱいからかいほうされるし、オムツやミルクのたしにもなるぞ、と

あいさいであるかなちゃんのおすすめのむずかしくなく、かつそこそこにじつようてきなかくしゆしかくでめんせつからさいようまでかたんんです

ニーちゃんはもりもりはたらきます。はたらきざかりのニーちゃんんです。

なつのあつさで危ない弁当を食べそうになった日もあります。家から追い出されそうになったこともありました。

それでも諦めず、腐らず自宅と公園を自主的に警備し続けました。

溢れる将来を、墮落と怠けで立派にニートとなり、未来を想像し

て絶望した事は一度や二度ではありません。

諦めずにいたから今がある。

そして、今夜！！ 念願の、出産立会いの大舞台へ、ついにデビューです

……

……

…

「うひゃー、労働って素晴らしいー！！」

が、スルー

まさかのスルーです

ニーちゃんはろっどついでよくまんたんでろっどつたのしいです
ですからろっどつかりバイトいれちゃいました

でもだいじょうぶです

かなちゃんはそんなよかんしてました

ニートだから、このとしにもなってニートなんだからオオポカするのだろっとなと

ぶつぶですからおたがいのことをわかりあえています

ニーちゃんとかなちゃんともっひとりでかぞくですから

おわり

その11のみんな

こつえんのちびっこらはゴウゴンこつこがおやにばれ、おやのみぐるしいせきにんのなすりつけあいであたいへんなことになりました

かいをとりにいったときにかなちゃんにでんわをしてきたひとは
いまはもうわかりません

たぶん、どつかのまちでじゅんしいんのひとをかんしているで
しょう

じゅんしいんのおじさんはきょうもじゅんしています。ぼくらの
おかねがすいさんしげんのほごやかいのようしょくになっているん
だよ。みつりょうははんざいだからね

ケーキやおねえさんもどつかにいきました。けっこんかてんし
よくしたんじゃねーの

ユキちゃんはニートをそつぎょうしてむしょくになったよ
ちいさくかつおおきなぜんしんです

ニーちゃんはいくじにかじにとしゅぶぎょうにふんとつしています
こどもがおおきくなったらバイトをさいかいしよとかがんがえ、
とりあえずこまかいぶひんをつかわないしよくをさがしている
さいちゅうです

かなちゃんはいくじきゅうかもそこそこにしょくばぶつきです
だいこくばしらすからね。えらいぞかなちゃん

こどもはなきます、のみます、だします。

かんぺきなあかごっぶりですういづところはかなちゃんにだろっ、
というかニーちゃんにはダメだろっ

ヨシダいっかはきょうもほのほのなかよしっかです。

なかよしさんになかぞくはいっつのひかよになもしくはごになかぞ
くになるひもとおくはないけど

そのときもみんなはなかよしでしょう

なんてたってかなちゃんがいるのですから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6221m/>

ニートのニーちゃん

2010年10月9日21時16分発行